

せいりょう園

[発行] 社会福祉法人はりま福祉会 特別養護老人ホームせいりょう園

〒675-0016 兵庫県加古川市野口町長砂 95-20 TEL 079-421-7156 FAX 079-421-6422

平成28年 6月 第184号 年間購読料1,000円 (1部100円)

メール seiryoen@bb.banban.jp ホームページ <http://www.seiryoen.or.jp>

長寿の末の幸せと役割

—認知症もダウン症も存在価値のある多様で柔軟な持続可能社会へ—

今、世界中で『認知症』が社会問題として注目されています。予防・治療の『特効薬』の開発が進められる一方で、『ケアの仕方』の研究も進んでいます。「老いに関して脳に変化が起こる病気」と解っても、全容は解明できずに根本的な治療法は無く、進行を遅らせるという薬が数種類発売されています。

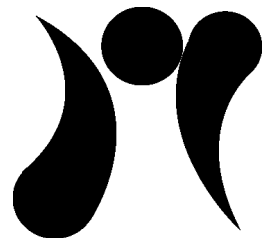
そして認知機能の障害が進行しても、感性や感覚・感情は大きく変化せずに保持されている事が観察されています。精神的なストレスやプレッシャーが生活面での混乱をより大きくすると云われ、ケアの仕方や側にいる人の接し方が重要になります。認知症の人の暮らしには、本人の『受容』と、周りの人の『許容』がキーポイントだと感じます。

一般的に認知症になると「何も判らない人」「責任無能力者」とされて、「誰かが管理・監督の責任」を負わねばならない、と考えられています。そしてご本人の身に起こる生活上の「リスクをゼロ」にする責任を、介護する家族や介護職に求める「意識と仕組み」の中で、介護現場が混乱しています。家族による虐待や心中・殺人に至るケースも多数生じ、介護職による虐待や殺人も報告され、介護職は離職率の高い不人気職種となっています。

徘徊途上でJRの線路に入り込んで事故死した、91才の認知症の男性の配偶者や家族に対して、JR東海が損害賠償を請求し、最高裁まで争われました。『長寿の行く末』に対して、社会全体が戸惑い混乱しています。

多くの人が、長生きしても「認知症にだけは成りたくない」と言います。しかし、80才代では4人に1人、90才を超えると半数以上は認知症になる、と云われます。認知症でなくても、年齢を重ねるに伴い、「知性と理性と体力」は確実に衰えます。利害損得の計算ができなくなり、認知・記憶能力も衰え、行き先も名前も忘れます。俊敏だった動きが緩慢になり、ゆっくりとした時間の流れが必要になります。そして栄養素を幾ら摂取しても、消化・吸収ができなくなって痩せ、

(次ページへつづく)



(前ページのつづき)

衰え、身長も縮み、仲間に生活の全てを任せて、最期を迎えます。最期を他者に委ねるのは、生身の人間が持つ、自然の摂理に添った本能であり、人間特有の社会性を次世代に引継ぐ為の、社会的使命です。

人が生身の存在である限り、80才を超え、90才を超えて認知症になるのは、自然の摂理に添って迎える『健全な老いの一つ』と受け取りたいと思います。「老い」を委ねられた仲間が戸惑い混乱しながらも、「健全に迎える死」を経験して、「健全な諦観」を育み、社会を健全に引き継いで行けるのだと思います。「老いと死」は社会的に大きな「意義と役割」を秘めた営みであり、「健全な老い」と「健全な死」と「健全な諦観」が、『持続可能な社会』を創る最も重要な要件です。世の多数がその重要な要件を経験して、次世代への社会的使命を主役として果たせるのが、「人生80年時代」の最も大きな成果なのです。

老いても認知症には成りたくない、と云う強い願いの裏側で今、出生前診断で胎児がダウン症だと判明した妊婦の96%が中絶をします。特別支援学校を視察した県の教育委員が、公的な会議の席で先天的な障碍児の減少を希望する発言をします。中絶や減少希望の裏側に、「過度で歪な健康志向」が潜んでいるように思えます。少数ながらも必ず生じる突然変異による『異質な存在』を否定する姿勢は、多様な人の存在を否定し、変化への柔軟性を拒否する、「硬直化した社会観」に繋がるように感じ、『ナチスドイツ』を想起させます。

子に遺伝子を伝えて命を引継ぐ本能は、全ての動物に共通するものですが、終末期を仲間に委ねて社会を引継ぐのは、数ある動物の中でも人間のみが持つ本能的習性です。動物の群とは違って、多様に柔軟に変化し発展してきた『人間社会の原点』が、『終末を仲間に委ねる本能』に在る、と考えるのが最も妥当です。社会を構成して生きる人間は、『生きる権利』と同時に『死の役割』を持って生まれ、老いて死を迎える暮らしの中に、『人間特有の変化に柔軟な社会性』を伝える『何か』が潜んでいるのだと思います。

老いの身を介護させるのは、他者に迷惑をかけるのでも、犠牲を強いるのでもなく、遺伝子では伝わらない『人として最も大切な社会性』を伝える、社会的使命を帯びた尊い姿です。生殖機能を失った後も長く生きた人間が、自らの最期を仲間に託して、個人的願望ではなく、社会的使命に添って『人生最後の主役』を演じる幸せの中で、覚悟して『死の役割』を果たすのです。

「何時までも元気で長生きしたい」との願いも、「親には何時までも生きていて欲しい」との願いも、素直な個人的願望ではあっても、社会的使命を帯びた老いの命はその願望を超えて、変貌の過程を曝け出し、本能に添って最期を仲間に委ねます。その『変貌の過程と死の覚悟』が、融通無碍に変化・発展する『持続可能な人間社会』を創り出す原動力だと、強く感じます。

団塊世代がその最期を委ねる超高齢社会が、終末期の数年間を認知症でさ迷う老人達も、ダウン症で生まれる子供達も、共に社会的使命を帯びた尊い存在として、その生命力を全うし、主役として最期まで生き抜く事が出来る、多様で柔軟な社会であって欲しい、と心より願います。

団塊の一員として、晩年の僅かの時間を認知症になったが故に、主役の座から引きずり降ろさないで欲しい、と切に切に祈るばかりです。

介護についてみんなで語ろう会（5月27日）

今回の語ろう会では、今年の3月1日に認知症者徘徊事故訴訟での最高裁判決の話題をきっかけに、もっと身近な認知症者の出来事について語り合いました。

話の中で「近隣の夫婦が外出していますが、奥さんが明らかに認知症の方です。夫が付ききりで介護している場面をよく見かけます。私は『大変ですね。えらいなあ～。私には出来ない。』と感じました。」

「ある日、町で知っている奥さんと久々に出会いました。その際ご主人は初対面。奥さんは認知症になっており、ご主人より『きっと何もかも忘れていきます。』と言われ、気にはなっているけど、奥さんを訪ねに行けない。訪ねてもいいですか？」との質問に対して「気になっていることを伝えて奥さんに会いに行けばいいと思います。」と対応の話が出ました。

夫が妻を介護している姿を見て「私には出来ない」と知人が感じる事。知り合いが認知症になり、気になるけど訪ねに行けないと思うのは何故でしょうか？

多くが認知症について身近な事として理解していない事、また社会の風潮、マスコミの取り上げ方も認知症にならないように努力しましょうと強調している事が原因ではないでしょうか？

家族が何とか解決しようと懸命に介護する事が美談として語られます。そこには認知症になったご本人の思い以上に、本人にとって良かれと思う家族の気持ちが前面に出て、本人は依存的になっていきます。

徘徊で交通事故や泥棒などのリスクを恐れて、部屋に閉じ込めてしまう。これでは、認知症者本人の想いは何処にあるのでしょうか？そもそも徘徊という言葉は、介護側・世間の認識であって、本人は徘徊ではなく理由があつての外出なのです。

よく介護職員に、周囲の方々から「大変ですね」「えらいですね」との声をかけられます。声をかける方は、本当にそう思って、声をかけているとは思いますが。

「認知症になりたくない。」と誰もが感じてしまうのは致し方ない事だとは思いますが。しかし長寿社会となった現在では、年を重ねていくと認知症になる可能性が高くなるのも現実です。今後、なりたくないと思われている認知症者は確実に増えていきます。

最高裁の判決要旨には、認知症者を責任無能力者と表記しています。認知症者を主役として考えていない為、その表記に何の違和感を持たず、議論も起きない社会です。そんな社会で認知症を理解して地域で共に暮らそうと言っているのは、何となく絵空事のように感じてしまいます。

（老人介護支援センター 入江良行）

【せいりょう園空き情報 平成28年 6月15日現在】

- ・サービス付き高齢者向け住宅「自愛の家さくら」：空きあり
- ・サービス付き高齢者向け住宅「リバティかこがわ」：4室
- ・ケアハウス：空きなし（バス・トイレ・キッチン付24㎡）
- ・グループホーム：空きなし
- ・グループホームまどか：1室

【問合せ先】 せいりょう園 TEL(079)421-7156 / (079)424-3433

ユニット型特養より

介護福祉士 竹中 満

私は福祉の世界に携わり、早12年が過ぎようとしています。

はじめは市役所で住民サービスに携われる職を希望していましたが、就職活動する年に介護保険がスタート。また、卒業研究テーマが介護保険制度ということもありました。就活担当の先生方より「人の手助けがしたいなら『介護』の世界に進んでみてはどうか？」とアドバイスもあって福祉専門学校3年を経て、介護福祉士として働いてきました。在宅サービス（ホームヘルパー）、グループホーム、多床型特養（100床）、介護老人保健施設（100床）・・・現在のユニット型特養。いろんな福祉施設を経験してきましたが、やはり教科書通りにいかないのが当たり前のように感じます。もちろん知識は必要ですが、経験に勝るものはないくらい個々に応じたケアをする必要がある為、日々の個別ケアとは？について考えながら仕事する毎日です。介護現場で利用者さんと上手くいかず、今まで何回辞めて、他職種に変わろうかと考えたことか・・・しかし、そんな時には利用者さんからの「ありがとう」の一言でどれだけ救われてきたのか分かりません。また、看取りでエンゼルケアを行っている時の利用者さんの安らかな御顔を見ると「この仕事でよかったなあ」と思うことが多々あります。

そもそもなぜ当施設のユニット希望で就職してきたかということ、やはり介護の基本である個別ケアをやりたいと思い入職しました。集団ケアは集団ケアとして利点もありますが、よく言われる「流れ作業」になっている部分が非常に多く、自分のやりたい介護はこれでもいいのか？と思いました。「トイレに連れてって」「おむつ換えて」などの訴えがあっても人員不足、時間不足を言い訳に「またあとでね・・・」と何回かわしてきたことか。

もちろん、そんなケアでは尊厳なども守れることも無く、ただ時間が来て帰るだけの毎日でした。100床もあればそれなりに人員も揃っているのではと思いますが、昨今この施設も介護職員不足に悩まされるのは同じです。

ある日利用者さんが「私、おむつやけどトイレでおしっこしてみたいねん」と強く言われた為、一緒にトイレに行き手すりに掴まって立っていただき便座に座り排尿されました。



平成28年5月28日（土） 野口南小学校 第33回 運動会

近隣の小学校で運動会が催されました。事前に案内文を戴き、せりょう園利用の高齢者14名、付添ボランティア3名、職員3名で参加させて貰いました。

躍動感ある子供達の演技を見る事が出来て、普段の生活とは違い、気持ちが高揚したように思います。

途中小雨が少しパラついた際に、地域の方々が協力して場所を開けて、車椅子の高齢者をテント内に誘導して頂きました。温かい気持ちにさせて頂きました。ありがとうございます。次回も参加したいと思っています。



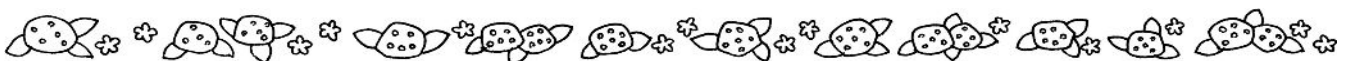
4年生全員で「南小ソーラン」の演技

その時、「やっぱおしっこはトイレでせなあかんわな、兄ちゃん！」と私に話されました。「あ、この方入所時から、おむつ対応やけど尿意もあり立位も安定しているからトイレ行けるな」と思い、介護主任、PTへ相談しました。すると「もう高齢で、無理したらあかんから、おむつ対応でいいんです」と断られました。その時より『利用者さんの意思尊重よりも職員側の都合』ではないのか？と考えるようになりました。そのような疑問も多々あり、個別ケアするなら、やはりユニットケアに携わっていきたくて、当施設に就職しました。初めの施設見学の際、グループホーム介護主任・ケアマネジャーに当施設の理念を説明して頂いた際には、なんとなくは理解できたのですが、ユニットへ配属され業務に携わるにつれて真意が理解できてきました。「起きたい時間に起きる」「食べたいときに食べる」「散歩したいときに散歩する」など利用者本人の生活リズムを尊重した点です。確かに時間のリズム、流れは大切ですが「ここは病院とかではなく『家』である」ことの意味に気づきました。また、現在ユニットにおられるNさんは、私も以前の職場から知っていますが、前まではおむつ対応でトイレ誘導のプランが一切検討されておらず、日中は、ほとんど寝たきりに近い状態でありました。しかし、ユニットで再会した際には尿意もあり、本人の希望に応じてトイレ誘導している点についてびっくりしました。

なんで今までトイレ誘導のケアプランの検討に至らなかったのだろう・・・と恥ずかしい気持ちでいっぱいでした。また多々のケースに応じ、残存能力を活かした介助を考えてチャレンジする大切さを知りました。

現在、ユニットに配属となってから1年が経過しました。

今後の目標として、ユニットケアの特性の把握・利用者さん・家族さんとの関わり方、個別ケアの大切さを学び、せいのりよう園の一職員として意識・自覚を持ち、貢献していきたいと思います。仕事上での分からない事は上司には、もちろん親身になって相談に乗ってもらい、私の今までの介護経験で得た知識なども聞いてくれます。そして的確なアドバイスを貰い、職場環境は大変ありがたいと感じています。気持ち的にも余裕がなくバタバタする日もありますが『ユニットケアであるからこそできるケアとは何か？』を日々考えながら、ひとつひとつ業務にあたっていきたくて。また自分の親なら「このユニットに入所しても、しっかりみてくれるなあ」と思っています。そんな環境作りを、これからも心掛けていきたいと思っています。



厨房だより

管理栄養士 田村愛弓

夏が近づき、気温の上昇とともに日差しがきついものになってきました。真夏の到来を肌で感じます。

せいりょう園では、敷地内にいくつか果物の木が生えています。その内の一つ、梅の木からは今年も多くの実が収穫できました。厨房ではその梅を使い、ゼリーやジュースにして提供しました。また小規模多機能やユニット型特養、デイサービスでは梅シロップ、梅ジャムにしたり、かりかり梅にしたりと事業所ごとに工夫して利用者の方に提供させていただきました。

利用者の皆様からは「暑さと湿度で参っていたが、ゼリーを食べたら口がさっぱりした」「梅の季節がきたんだなぁと実感した。おいしかった」などのお言葉をいただきました。改めて、食材は季節を知らせてくれる大切なものだと実感し、今後も旬ものをいろいろな形で提供させていただこうと思います。



仏教講話 6月6日(月)



真宗大谷派 真宗寺 邨上^{むらかみ}了圓^{りょうえん} 住職

6月4日に梅雨入りしましたが、今日は肌寒い位の気温となり、久しぶりに爽やかな日となりました。サ高住にお住まいの皆様も「5月に暑い暑いと思って薄着にしたら、急に涼しくなったり、蒸し暑くなったりで体調が悪い、頭も重い、変な気候や、梅雨は嫌やね。」「今日は気持ちいいから食欲も出る。」と、ひとしきり気候の話で会話が弾んでいました。

今日の仏教講話は神吉町にある真宗寺の邨上^{むらかみ}了圓^{りょうえん}住職でした。ご住職はほぼ毎年のようにこの時期に来て頂いていましたが、昨年はお姿を拝見することが出来ませんでした。どうされたのかと気になっていました。

講話の冒頭、「私は今年還暦になりました。毎年のようにこの時期に来さしてもらってましたが、昨年は入院しておりました。」と話されました。「4月の終わりから頭の手術を4回しました。あちこちの法話は全部断り、自分が和みそうなここ(せいりょう園)と刑務所と自分のお寺だけ、法話させてもらっています。」この言葉を聞き、有り難い気持ちで身が引き締まる思いでした。

4回の手術は、慢性硬膜下血腫によるものだったそうです。ご住職は毎日、加古川をバイクでお参りに回られていましたが、雨の日に通夜に行く途中に転倒されたとの事です。その翌日にもゆっくりと走行中に転倒され、頭は打っておられなかったのですが、肩を打たれました。

ひと月後には広島へ行かれ、広島駅の階段から落ちられました。またある日、大阪での

会議を終えられた後も、周りの人が歩かれている姿を見て様子がおかしいことに気が付かれたようです。疲れやすくもなり、明日にでも病院へ行こうと思われていた矢先、主治医の先生が墓参りに来られ、ご住職の姿を見てすぐに病院を手配して頂き、緊急手術をされました。溜った血を抜く手術をされ、その後、抜糸にいく度にまた血を抜く手術をされました。4回目の時には呂律が回らなくなりましたが、手術ですぐに回復。その後も呂律が回らなくなる事があり、薬の服用を続けておられる為、眠くなるので車の運転は出来ずに、檀家さんへのお参りやら法話に出かけられる時には、役員の方に送り迎えをして頂いているとお聞きしました。

ご自分の病気からいろんな事を考えられ、話をして下さいました。「老病死は避けて通れません。『老いる』『病になる』『最期のお別れをする』『あっちが痛い、こっちが痛い、歩けない

第31回 せりょう園 納涼盆踊り大会のお知らせ

平成28年7月30日(土) 18時～ 開催いたします。
毎年利用者・ご家族は勿論、日頃お世話になっている
ボランティア・地域の方々にもお越しいただき、
夏の夕暮れを楽しんで、お過ごしいただいています。
今年も、たくさんの皆様のご来場をお待ちしています。



ようになる』、それは当たり前の話です。私たちは老いたくない、老いを認めたくないと思って生きている。自分がそういう身になって、やっとお互いに生きている事を実感し、不自由な事を感じられます。そうすると優しくなれます。人生は長さだけではありません。深さもあれば幅もある。いつか幕が下りるならそれまでにしておきたい事はないのか、知人に家族に何を残していくのか、それはいろんな事をくぐって来られた皆さんが今の内に考えておかなければと思います。そういう寿命を生きている、頂いている命(長さ)、寿(深さ・質)をどう生きるのかを考えましょう。自分の事ばかりではなく、共にお互いの事、相手の尊さ、命の重さに気付き一緒に生きましょう。自分が思う通りにならないと苦勞だと考えますが、それは辛抱する事や苦勞ではないのです。一緒に生きていく事が大切です。私も3回目までは、すぐ手術なのでそんなに思わなかったのですが、4回目の手術の時にはいろいろ考えながら手術を受けました。8月には熱中症になり、代謝も悪くなって、老化をひしひしと感じるようにもなりました。

自分の身体を大事にするという事も当然ですが、それと共に年とっている者だけが大変なのではない、若い人も悩み苦しみながら生きている。誰も代わりに生きてはくれない人生を歩んでいく若い人たちに幸多かれと願い、それが若い人たちにも、共に生きるという事を伝えていく事なのではないでしょうか。」と話され、講話が終わりました。

ご自分の体験からのお話は同じ年代を生きる者にとって心に響くものでした。この後、お迎えの方が見えるまで待たれて帰って行かれましたが、貴重なお時間をありがとうございました。またのご講話を楽しみにしております。

(岡村 照代)



平成28年6月6日(月)～10日(金) トライやるウィーク



入居者と洗濯たたみ



お年寄りに寄り添う



デイで音楽療法に参加

加古川中部中学校より、3人の生徒が参加しました。初めての経験という事で緊張した面持ちで来園して、初日のオリエンテーションを受けていました。日が経つにつれ表情が穏やかになり、最後のほうは笑顔を見せてお年寄りと触れ合っていました。主にお年寄りとの関わりを中心に行いました。ただ寄り添うだけで感じる事。相手を想い言葉を発する大切さについて体感してもらいました。

5日間の経験が、次のステップに繋がれば良いと感じます。

グループホームまどか より



食事作りを通して思うこと

調理員 平山昌代

私の調理業務は、大半が入居者Aさん（94才）との会話から始まります。キッチンに立ち、昼食の準備をやり始めて数分が経つ頃、

Aさん；お姉さん、何かないか？

私；少し前に朝ごはん食べられた所ですけど・・・

また、暫くすると同じ事を聞いてきます。

Aさん；お姉さん、おいしいもの食べたいわ

私；おいしいものですか？今は大根、人参、たまねぎ、きゅうり・・・

しかないですね。きゅうりに塩でもかけて食べますか？

Aさん；キャ～お姉さん、ようそんなこと言うね。

周りの入居者の方々が、その様子を見て笑われます。それでも、Aさんは、

Aさん；お姉さん、何かちょうだい

私；Aさん、今はまだ朝の9時30分過ぎた所ですよ。Aさんがおいしく食べられる様に作っていきますから、10時のコーヒーでも頂いて待っててもらえますか？

頭の中には、食べる事が一番かのように溜め息をついては、Aさんは「ああ、何かないかなあ～」とつぶやかれています。

食事が出来上がって声を掛けると、Aさんは「ありがとう」って本当にうれしそうです。食べ始めると「ああ～、おいしい。お姉さん、おいしい。とってもおいしい。」と言いな

ら完食します。周りの入居者の方々も黙々と食事をされる中、Aさんのつぶやきに反応する方もいます。「おいしい。おいしい。」と言われて食べて頂くのを聞くと、食事が出来上がるまでの会話も調理業務に支障を来たすことがあるのですが、なぜか吹っ飛び、スッキリした気分になります。

毎日、昼食もおやつも夕食も同じ繰り返しですが、日々入居者との関わりに変化があり、笑ったり、時には話しのすれ違いで理解出来ない事もあります。生活の中で食べる事が一番の楽しみであり、食べる事が生きる為のエネルギーにもなり、食事摂取量が入居者の健康のバロメーターです。

基本、献立通りには作っていますが、その日の食材の状況に応じて入居者の好まれる献立にする時もあります。時折、揚げ物、お寿司、変わりご飯などを作ります。ほぼ全員が完食です。完食で食器が戻ってくると達成感もあり、次の献立を見ながら意欲が出てきます。食べる事が絶対の楽しみで、その中に入居者の笑いがありコミュニケーションがあり、また入居者の一番満足度が上がる時なのかもしれません。

介護職員と連携を取りながら、入居者の状態に応じた食事を作っていく様に努めていきたいと思います。